

連続シンポ 北海道酪農の歩みと将来展望 「草創期の牧場が今に つなげているもの」 (町村農場 創業100周年記念シンポジウム)

▶3月23日
(北海道江別市)

酪農王国北海道150周年と町村農場創業100周年を記念し、北海道江別市にある酪農学園大学で酪農の過去、現在、未来が語られた。

講演1

「自分が考える

『酪農三徳』とは？」

宇都宮牧場 代表取締役 宇都宮治氏

私の生まれは札幌市厚別で、1963年の小学2年まで電話がない環境で育つ。牧場は小学6年のときに長沼へ移転した。独特の価値観を持つ祖父母や父母に育てられ、その生活は牧場の中でだいたいをまかなう、自給自足に近いものであった。乳搾りや牛を眺めて過ごすのが好きで、祖父母と東京へ行ったときも都会に魅力を感じなかった。そして、酪農学園大学に進学し、実習で20日間過ごした十勝の酪農家に「あなたたちは立派だけれど人間らしい生活に見えない」と言われたことが心に残った。海外では、1年半弱アメリカ・ウィスコンシンの酪農家で実習があり、そこで楽しさや充実感を覚えたことで自分もこういう生き方がしたいと思った。

現在は私が4代目で、酪農を始めたのは曾祖父の仙太郎になる。当時の酪農はベンチャー事業のようなも

ので、酪農をビジネスとして確立させた。祖父の勤(2代目)は、種雄牛の販売やホルスタイン登録事業で生計を立てた。父の潤(3代目)は、優良乳牛や種雄牛の販売、酪農家主催の共進会を開始した。祖父も父も職人肌で、一生懸命取り組むとバランスを欠くタイプであった。

私は、祖父や父とは異なってバランス感覚があるが、スペシャリストにはなれないという性格である。父の下で働いていたが、33歳くらいにときに父が体調を崩し、突然後を継ぐことになる。当時は、牛の個体販売価格が低下しており、一番価格が安いときで現在の半分以下ほどであった。そこから自分のやり方を模索した。そのころ、さまざまな人の意見を聞くが、「銭勘定だけではない」「きちんと牛を飼っていれば、お金は後からついてくる」と思った。自分のスタイルを確立したのは40歳を過ぎてからであった。このころが一番仕事をしたと思う。

ここ2、3年は人手不足が続き、デントコーンとTMRを止めた。その結果、草に手がかけられるようになり、草の良し悪しが牛にまともに表れ、牧草づくりの面白さ

に目覚め、「牛づくりのための草づくり、そのための土づくり」をしている。自分がやるうと思つたことが30年かかっておむねできた。

曾祖父(仙太郎)の「酪農三徳」は、「健康に良い」「うそをつかなくてよい」「役人に頭を下げなくてよい」の3つであるが、私はそれぞれ「社会的ストレスが少ない」「人間性が大事」「補助事業に過度に依存しないことと自己責任」であると捉えている。

いまも昔も変わらないものは、牛を大事に飼うこと、そして時代を見ながら状況に対応することである。春に従業員が加わった。当人に聞くしてしたが、宇都宮牧場に決めた手はうまく言い表せないけれど、他にはないものがここにはあったから」という。

きつとそれは、先代たちから受け



宇都宮治氏

継がれてきたものであり、それは「古民家のたたずまい」と同じ、文字や数字では表せないものなのであろう。

講演2

「町村農場は酪農とウシ生業にどう向き合おうか？」

町村農場 代表取締役 町村均氏

私は、100周年を迎えた町村農場の3代目である。大学卒業後のサラリーマンをしていた20代のころは自分が農場に戻ることにするとは思ってもいなかった。

当時、町村農場（現在の旧町村農場）は父と兄が経営していた。私が戻る数年前から、旧農場の周りが家に囲まれ、行政から市街化区域指定を受けていた。兄が中心となってまとめあげた移転事業であったが、移転直後に急死した。我々兄弟は4人で三男一女。独身であった三男の私が30歳で後を継ぐことになった。そ

の決断に迷いはなかった。

移転後の牧場は、昔の牧場の面影がなく、新しい酪農スタイルであった。昔は牛舎に牛をつなぎ、しゃがみながら搾乳を行っていたが、フリーストール（ミルクングバーラー）方式へと変わっていた。人が立って搾乳でき、牛も牛舎ではつながれなくなり、牛にかかるストレスが軽減した。これを見たときにイノベーションを実感した。

町村農場は私で3代目であるが、北海道に渡ってきてからという意味では4代目になる。曾祖父の町村金弥は、福井県の生まれで、小学校時代に奉公先で商売を手伝いながら学校に通っていた。そして、奉公先の了解を得て、国費で勉強できる学校であった札幌農学校に2期生として入学するため、北海道へ渡ってきた。同級生には、新渡戸稲造、内村鑑三など名だたる人物がいた。農学校卒業後は真駒内にある官営

道開拓のためにアメリカから呼ばれたお雇い外国人のエドウィン・ダンが開いたものだ。この牧場に曾祖父が勤めていたころ、後に酪農専門スタイルを確立した宇都宮仙太郎氏が訪れており、その後アメリカへ乳牛の勉強のために留学している。帰国後、仙太郎氏は札幌で市乳の販売を開始した。その仙太郎氏の牧場に子供のころによく遊びに行っていたのが祖父の町村敬貴である。牛の世話を手伝い、牛が大好きになって、早

うちから酪農家を志した。そして、祖父は札幌農学校を卒業後、アメリカに渡る。アメリカ行きの際取りは、仙太郎氏の手配したようである。アメリカで10年間実習し、大学にも通った。30歳を過ぎてから日本に戻って結婚した後、また単身で3年ほどアメリカで過ごした。帰国後、1917年に石狩で町村農場を創業、そこで10年経営し、1927年に江別へ移転する。牧場を始めたころの生業は、牛の繁殖や個体販売が中心で、搾乳してはいたが、祖父の関心は専ら牛づくりにあった。実習生もたくさんいたため、牛を売らないと農場の経営が成り立たないということ

の

業は、牛の繁殖や個体販売が中心で、搾乳してはいたが、祖父の関心は専ら牛づくりにあった。実習生もたくさんいたため、牛を売らないと農場の経営が成り立たないということ

で、祖母が祖父のいない間に牛を売って経営を支えていた。時代が変わり、個体の販売価格が下がり、父の代には繁殖事業を一農家が手がける

のが難しい時代になっていた。そして、新しい事業として、1966年に飲用牛乳事業を始めた。

の

時代が変わり、だんだんと経営の主体が牛乳・乳製品へと移りつつあるなかで、移転することになる。そのときの兄の判断として、町村農場は今後、牛乳・乳製品の販売で生計を成り立たせるという決心をした。当初は、牛乳とバター1種類しか製品はなかったが、それ以降、ヨーグルト、祖父がアメリカから持ち帰ったレシピをそのまま商品化したアイスクリーム、低脂肪乳や無脂肪牛乳など、新商品を開発して販売している。町村農場の商品は、お客様に値段が高いといわれ、店舗に置いてもなかなか買ってもらえなかったため、直接売ることができるようにと、1998年に初の自社ブランド専門店を江別市内のショッピングセンターに出店する。現在は、本社直売所を含め、江別市内3店、札幌市内に3店、東京・大阪に各1店、横浜に2店展開している。

また、牧場内では2000年にバリオガスプラントを稼働させた。移転前（江別）は牛の排泄物をたい肥化して畑にまいていた。しかし、移転後はスラリー処理をしてゲル状のまま肥料化した。これがないとま

ったく異なる臭いで、すぐに周りか



町村均氏

曾祖父が初めて就職した真駒内の牧場は、北海

道開拓のためにアメリカから呼ばれたお雇い外国人のエドウィン・ダンが開いたものだ。この牧場に曾祖父が勤めていたころ、後に酪農専門スタイルを確立した宇都宮仙太郎氏が訪れており、その後アメリカへ乳牛の勉強のために留学している。帰国後、仙太郎氏は札幌で市乳の販売を開始した。その仙太郎氏の牧場に子供のころによく遊びに行っていたのが祖父の町村敬貴である。牛の世話を手伝い、牛が大好きになって、早

うちから酪農家を志した。そして、祖父は札幌農学校を卒業後、アメリカに渡る。アメリカ行きの際取りは、仙太郎氏の手配したようである。アメリカで10年間実習し、大学にも通った。30歳を過ぎてから日本に戻って結婚した後、また単身で3年ほどアメリカで過ごした。帰国後、1917年に石狩で町村農場を創業、そこで10年経営し、1927年に江別へ移転する。牧場を始めたころの生業は、牛の繁殖や個体販売が中心で、搾乳してはいたが、祖父の関心は専ら牛づくりにあった。実習生もたくさんいたため、牛を売らないと農場の経営が成り立たないということ

らクレームがあった。その悪臭対策として8年後にたどり着いた結論がバイオガスプラントの設置であった。

現在では、町村農場の事業に直接かかわらない部分でも活動の幅を広げており、市内近隣の畑作農家や、市内の食にかかわる企業などと協力している。今後も江別の食をPRする活動をやっていきたい。

町村農場の経営スタイルは、酪農専業から多角化経営へと、それに合わせて牛舎の様子も変化させ、時代時代に合わせた経営をしてきた。そんななかでも、変わらないものはいかに残していくのか、未来につなげていくのが重要なポイントであると考え。

講演3

「牛や自然と人間が共生できる酪農を目指して」

由仁黒沢牧場 代表取締役 黒澤耕一氏

(この講演は、主催者で酪農学園大学前学長の干場信司氏より黒沢耕一氏のインタビュー内容を報告する形で行なわれた。)

黒澤耕一氏は、酪農学園大学や北海道製酪販売組合連合会(現在の雪印メグミルク)の設立者で、北海道酪農の父と呼ばれる黒沢西蔵氏の孫に当たり、1948年に札幌市月寒に生まれる。3歳で千葉市へ引越し、

高校まで当地で過ごし、酪農学園大学へ進んだ。父の信次郎氏が千葉に建設した牧場を手伝うために大学を中退する。その後、1985年に北海道由仁町へ移転した。

現在は、100haの土地で放牧を主体に牛を170頭、うちブラウンスイスを50頭飼養し、フリースタイル方式を採用する。酪農経営に関する考え方として、人間がなんでもコントロールするというのはなく、野生的で粗放的な畜産や、人間が利用できないものを利用し、生産してくれる牛を、牛しか飼えないところで、牛に食べさせてもらう自然農法が本来の姿。それぞれの土地に合った生き方があってよいのではという酪農哲学を持つ。まとめると、「牛や自然と人間が共生できる酪農」となる。この哲学の背景として、いまの酪農や農業が抱える問題点を強く感じている。それは、利益追求、行き過ぎた経済優先のなかで消費者も生産者も人間の生きる価値を見失っていることである。一部の人の利益のための生産になっていないだろうか。世界には食べることができない人々がたくさんいるなかで、人間が食べられる穀物を飼料にして営む酪農は長続きするのだろうか。耕一氏は、西蔵氏の書物を読んだことがない。高校生のとき、酪農経

営を志そうと決めていたため、西蔵氏に北海道の牧場へ見学に連れて行ってもらった。その際、数多くの一流酪農家も見せてもらったが、どうも納得できなかった。そこで、こんな問いを西蔵氏に発した。

「若い人が農業をする意欲が、プライドだったり、共進会で一等賞を獲ることだったり、きれいな牛を並べて自慢すること、に基づいているのは本当ではないのですか?」「牛しか利用できないところに牛を入れて、土地を良くし、そこから収入を得て、人間が食べさせてもらうということを日々感じながらやれないと、本物ではないのですか?」

それに対して、西蔵氏は「お前の言うとおりだ」と答えたという。最後に、干場氏は、耕一氏が発信しているFacebookの写真を見て、牛や自然と人間が共生できる酪農を目指していることが伝わっていると締めくくった。

パネルディスカッション

干場氏と高橋圭二氏(酪農学園大学教授)の司会で、宇都宮治氏、町村均氏、西本幸男氏(デリーリマン社顧問)をパネリストに迎え、活発な意見交換がなされた。まずは講演を受けて西本氏からまとめとして感想が語られた。

本日は、酪農の草創期についてたいへんよいお話が聞けた。4月に、不足払い法から改正畜産経営安定法へ変わる、たいへん大きな変化を迎える時期に、たいへん意味のある機会であった。

数多くの牧場がなくなっていくなかで、3つの農場がいままも経営を続けているところに非常に驚き、驚異だ。干場氏が今回狙いとしているのは「酪農の哲学」である。哲学は、学問的なものではなく、いままでの経験から築き上げた人生観、世界観、基本的な考え方、思想にあると思っっている。それは、町村敬貴氏の「土づくり、草づくり、牛づくり」、宇都宮仙太郎氏の「酪農三徳」、黒沢西蔵氏の「三愛精神」「健土健民」を具体的に示したものではなからうか。酪農牛乳からスタートし、飲用牛乳が余って、当初北海道では基本的には練乳に加工され、50年後にバターが作られ、いま北海道酪農は全国の53%の生乳生産を占める。その礎が、明治維新の数年後の明治政府による政策により、酪農を主体とする北海道開拓事業となる。酪農のためにお雇い外国人として招かれたエドウィン・ダン氏のアメリカ式酪農は行き詰まりを見せたが、その後、町村金弥氏、宇都宮仙太郎氏、黒沢西蔵氏などの出会いとつながりが酪

農を進展させ、今日につなげてきた。

また、当初開拓時の乳牛はエアシヤ種を推進していたが、牛乳の需要の高まりから宇都宮仙太郎氏によってより乳量の出るホルスタイン種が導入されるとともに日本に根付いた。これも、明治維新というか、民間が主導したすばらしさがある。

そして、加工品に関しては、町村農場では、練乳ではなく、原点としてバターを作っていた。最近では6次産業化という酪農経営が出てきたものの、これまでは乳牛農家、加工業と分業が続いていたが、そんななかで町村農場では乳製品まで手がけている。

これからの酪農がどのような方向へ向かうのか非常に興味があるところではないかと考える。

……
質問…いまの酪農情勢と、青天井で搾れる状況で経営拡大してメガファームになる一方で、土・草・牛という酪農は大きくかけ離れていっていると思うが、その点についてどのような見解を持たれているか。

宇都宮氏…ここ先々の酪農をどのようにしたらよいのか正直難しい。ただ、自分の頭の中では日本の労働人口が減る、ここ一点に集約している。昭和40、50年ごろのように、頑張ればすべてが報われるということには

ならない。資金があっても建設業界の人手不足で牛舎が立てられないという状況も考えられる。中期的な目標を立てないと不安だ。法人化する

牧場も、家族経営の牧場もさまざまに困難なことが起きるだろう。そのため、家族経営で酪農をしつつ、メガファームに出資をして二足の草鞋を履く方法や、町村さんのように乳製品の加工販売に力を入れていく方法もあるだろう。宇都宮牧場のある長沼町は非常に景色が良く、新千歳空港にも近い。現に町内でグリーンツーリズムなどをしている。こういったことを加味しつつ、ファームインのような事業の多角化をおぼろげに考えている。

町村氏…難しい質問だ。これから人口が減るのは間違いない。酪農産業ではそれ以上の勢いで酪農家が減っている。とくに府県のほうが非常に弱体化しているように思う。おそらく今後は北海道が否が応でも肩代わりしていかなければならない。そういう意味で、変な言い方だが、北海道酪農の未来は安定していくのでは。それに見合った規模の拡大は一つの経営方法だろうが、そこにかかる投資額が普通に10億、20億となるとあまりにも大きすぎる。どんな機械でも壊れ、その周期が回ってくる。ここ5年、10年先がどうなるのか気

になつていく。いまの環境では決して大幅な規模の拡大はしないが、そのような道を否定するものでもない

と考える。
質問…循環型酪農の考え方について。宇都宮氏…宇都宮牧場では、飼料やふん尿は牧場内で賄い、処理している。自分の生産基盤の中で、きちんと処理還元していけば循環、そういう意識でやっている。

町村氏…現状ではなんとかできていく。ただ、もっと良いやり方、適正なやり方はあると思う。自分が農場に戻って26年経ち、いまのマネージャーが上手にやってくれている。

干場氏…黒澤耕一さんの牧場では、昔から循環させるのが当たり前。当然のこととしてスタートしており、それをきちんと守っている。ただ、新しく始められた方の中には、循環ができていない牧場も増えてきたのかと感じている。

……
その他、酪農学園の教育、酪農のスタイルについて活発な意見交換がなされた。最後に、干場氏が次のように総括した。



「3つの牧場について酪農の方法は少し違う部分もあったが、やはり循環させながら生産するということが共通の考え方で、草創期からつながられている酪農哲学だ。連続シンポジウムということで、今後、規模にかかわらず、過去、現在、未来に向かって、どういう酪農形態をつなげていくのか議論を進めていきたいと考えている」
(田所かおり)